

小島正憲

1951年5月、チベタン коммуニストのプンツォク・ワンギェル氏、毛沢東とダライ・ラマの対談の通訳を担当。  
1960年、プン・ワン氏、北京秦城監獄に投獄される。9年後に「反革命」の判決。獄中で弁証法の研究に専心。  
1978年、仮釈放。名誉回復後、獄中での研究をもとに、弁証法探求の書物を数冊発刊。  
2012年2月、チュイデンブン氏、プン・ワン氏の著書を邦訳、「チベット人哲学者の思索と弁証法」出版。  
2012年3月、北京にて出版記念パーティー開催。プン・ワン氏90歳。

## 1. 出版記念パーティー

3月24日夜9時、私は北京市朝陽区惠新西街にある西藏大厦の周囲を、コートの襟を立て帽子を深くかぶりマスクをして、監視カメラを避けるように、一人で何度も歩き回った。その西藏大厦で、翌日の正午から、私の主催で、プンツォク・ワンギェル氏の「チベット哲学者の思索と弁証法」の出版記念パーティーを行うことになっていたからである。それは、一昨年、プン・ワン氏の本を日本で出版しようとしたときからの計画であった。ところが昨年未からチベット地域で、チベット仏教僧たちの抗議の焼身自殺が相次いでおり、いかに哲学書の出版記念パーティーであるといっても、チベット関係の催し物を日本人が絡んで北京で行うということは、中国政府や公安から危険視される恐れがあった。その上、翻訳者のチュイデンブンくんの故郷の青海省チベット族地域では、かなり事態が緊迫しているようであり、彼から「私の中国入国が拒否される可能性が強い」という理由で、出席辞退の連絡が入ってきた。さらに小島衣料の関係者から、最近の想定外の重慶事件の余波で、北京市内は一触即発の状態できわめて緊迫しており、そのような時期の「北京入り」と「記念パーティーへの出席」を取りやめるようにと、強く進言された。

私はかなり迷った。そして出席をあきらめ、その旨を北京のプン・ワン氏の秘書に知らせた。欠席の最大の理由は、私の行動が小島衣料の中国での経営活動に大きな影響を及ぼすかもしれないし、事業関係者に多大な迷惑をかけるかもしれないと思ったからである。私は小島衣料の経営から、数年前に全面的に退き、今では株主として存在しているだけであり、その意味では小島衣料の経営活動とは無関係な人間となっている。しかしながら、もし中国で問題を起こし、公安に囚われの身にでもなったら、やはり小島衣料も無関係では済まないだろう。その結果、多くの事業関係者が路頭に迷うことになるかもしれない。私はこの際、隠忍自重しようと思ったのである。

プン・ワン氏の秘書からは、すぐに、「記念パーティーの主催者であり、日本でのこの本の発行のスポンサーである小島さんと、訳者のチュイデンブンくんが二人とも欠席するようでは、出版記念パーティーは成り立たない。せつかくプン・ワン氏がこの日を楽しみにしていたのに、それでは困る。どうしても出席してほしい」との答えが返ってきた。それに対して私は、「身の安全は確保できるか」と問い返したが、明瞭な返事はなかった。しかし私は、その後、プン・ワン氏の中国革命への情熱と獄中18年の苦闘に比べれば、私の心労などは小さなものだと思い直した。チュイデンブンくんにも出席を促し、二人揃って出かけることにした。ただし念のため秘書に、当日は記念パーティーの看板などは一切出さずに、ひっそり行うようにと頼んでおいた。そして私は西藏大厦から歩いて5分ほどのホテルを予約しておき、前夜、無駄なことだと思いつつ、公安に踏み込まれた時の逃走経路などをみつけておくために、散策に出かけたという次第である。

3月25日正午、記念パーティーの会場に、プン・ワン氏が現れた。私は駆け寄ってしっかり手を握った。しかし歴戦の勇士、中国革命の生き証人を目の前にして感激し、言葉が出なかった。た。プン・ワン氏はチベット族の中でも精悍さが際だっているというカムパの男性だけあって、年齢を重ねても堂々とした体躯であった。おそらく毛沢東とダライ・ラマ14世の間に挟まれても遜色はなかっただろう。20人ほどが座れる円卓の主賓席にプン・ワン氏が着き、私は左隣の席に座った。15分ほど過ぎたころほぼ全員がそろい、パーティーが始まった。

まず司会から式次第の発表があり、次に出席者の紹介が行われ、プン・ワン氏の学術研究仲間、親族などがかわるがわる立ち上がって会釈を交わした。そしてプン・ワン氏に大きな花束が贈られた後、私のあいさつとなった。私は2日前に考えておいたあいさつ原稿を取り出し、落ち着いて読んだ。以下がその全文である。

本日は、まことにおめでとございます。

私がこの本のことを知ったのは、阿部先生の本を読んだときのことで。

まず коммуニストとしてのプンワン氏の中国革命への貢献に強く惹かれました。

もともと私も若きころ、共産主義革命を志向していましたから、その情熱と行動に心を打たれました。

続いて、チベット哲学者として、獄中で弁証法について研究されたことに、強い関心を持ちました。

私も若きころ、唯物弁証法について学び、自分の「ものの見方、考え方」を形成したからです。

すぐに「弁証法新探」の本を取り寄せ、読んでみましたが中国語であることもあって、まったくわかりませんでした。

ただしプンワン氏の著作だから、きっと素晴らしいものだろうと思いました。

さっそく阿部先生に相談しましたところ、「翻訳する本は、“月には液体の水が存在する”の方がよい。翻訳者としては、チュイデンブンくんがよいだろう」と教えていただきました。

その後、時間はかかりましたが、とにかく翻訳でき、明石書店からこの本を世に送り出すことができました。

私はこれで、コミュニストとしてのブンワン氏の革命への情熱と、チベット哲学者としてのブンワン氏の思索の気高さを日本に紹介することができました。大満足です。

また本日、このようにして中国革命の生き証人としてのブンワン氏とお会いできて、感激しております。

私も今まで、生きてきた甲斐があったと思っております。

今後は弁証法の研究を皆様と共に続けていきたいと思っておりますので、よろしく願います。

皆様、本日は本当にありがとうございました。

私はこのあいさつの中で、ブンワン氏が、毛沢東とダライ・ラマ14世の対談の通訳を行うなど、歴史的な大任を果たしたことへの感想など、少し政治的に立ち入った話をしたかった。しかし身の安全を考えて、そのような話を避けた。次いで、訳者のチュイデンブンくん、阿部治平先生の順であいさつをされた。阿部先生はあいさつの中でブンワン氏の弁証法についての解説、チュイデンブンくんの優秀さなどについて話され、最後に近日中にブンワン氏の伝記を書く予定だと言われた。主賓としてのブンワン氏のあいさつは、秘書が代読するという形であったが、ときおりブンワン氏が注釈を挟み、なごやかな雰囲気が進んだ。ブンワン氏の学術仲間も次々とあいさつに立った。

1時間ほど経って、やっと乾杯、宴会開始となった。そこまで記念パーティーは、何事もなく進んだ。ブンワン氏も私もミネラルウォーターで祝杯をあげた。座がなごやかになってきたので、私はブンワン氏に会ってぜひ聞きたいと思っていたことや、京都大学の西大広教授に頼まれていた質問を、少し大きな声で聞いてみた。しかしブンワン氏からは、なんの返答もなかった。代わりにブンワン夫人が、「そのような質問にはこの場では答えにくいので、後ほど別室で個人的に話します」と言われた。なお私の質問は、「毛沢東とダライ・ラマ14世についてのブンワン氏の個人的感想」で、西大先生のは、「毛沢東が1956年当時に、“チベット工作に関する講話”で、自治区では党書記もまた少数民族でなければならないと書いたとされているが、この文書は本当に存在するのか」というものであり、私にはさほど、政治的に敏感なものとは思えなかった。それでもこの場では返答を差し控えるということは、やはりこの場は警戒すべき場所なのだと思います。

そこで私は、名残惜しかったが、最悪の場合を考えて、予定通り途中で退席することにした。とにかく記念パーティーを開催でき、ブンワンさんの人生に花を添えられたことに満足し、あとは無事に日本に帰国することが大事だと考えたのである。前日に調べておいた道を辿って表通りに出たら、運良くタクシーが来たので、それに飛び乗り空港に向かった。フライトは青島経由で、出国手続きは青島だったので、北京を離れてからも緊張はかなり続いた。青島を出て機上の人となってからも、なんとなく落ち着かなかった。

2時間ほど経って、やっと飛行機の窓から名古屋の街の灯りを見たとき、私の頬を一滴の涙がつつた。それは、憧れていた中国革命の勇者であり、獄中で18年間を不屈で過ごした哲学者のブンワン氏の熱き血潮に触れられた感慨と、今まで中国で働く日本人として贖罪感に苛まれてきた私が、些少ながらそれを償う一石を積むことができたという思い、そしてなによりも、祖国日本に、無事帰ってくることができ、多くの関連者に迷惑をかけなくて済んだという安堵感が絡まり合った複雑な涙だった。

## 2. 「長征」と弁証法

私がチベット問題に強い関心を持つようになったのは、やはり2008年のチベット暴動からである。あの暴動が起きたとき、私は即座に、長征途上の毛沢東の率いる労農紅軍とチベット族との戦闘を思い出し、「怨念説」を打ち出した。私が若いときよく読んだ岡本隆三氏の「長征」という本の中に、労農紅軍とチベット族との戦闘場面の描写が頻出していたのを覚えていたからである。私は書庫から「長征」を引っ張り出して読み返してみた。やはりそこには10か所に及ぶ戦闘場面とチベット族に殺害された紅軍兵士の様子が明瞭に書き込まれており、「労農紅軍は長征期間中の1/4に当たる92日間を、チベット族地域で過ごした。そしてそこでは常にチベット族の敵視の中で過ごさねばならなかった。ラマ僧やラマ寺の多くも反抗的で協力的ではなかった」と記してあった。それらの個所を読んで私は、「毛沢東や労農紅軍の兵士たちの心の中には、チベット族への“怨念”が残存しており、それが今日まで続いているのではないかという考え」を確信するに至った。私の個人的経験からも、人間の「怨みつらみ」の心情は、その後の人間の思想や行動を大きく規制すると考えていたからでもある。

まず私は、長野の北京五輪聖火リレーの現場に向き、そこに集まっていたチベット族にも漢族にも、その「怨念説」を問いかけてみた。しかし彼らからはまったく反応はなかった。その事実さえも知らなかった。つまり彼らの心のなかには、「怨念」は残存していなかった。また当時、私の「怨念説」は、多くの人から冷ややかに見られた。それは私の「怨念説」の論拠が、岡本氏の「長征」だけであり、なおかつ現場検証もなされていないからであった。私はそれを当然のこと

であると思った。そこで私は、チベット関係の書を片っ端から読み込んで、その証拠を探すことにした。また毛沢東率いる労農紅軍の「長征」の戦跡を、自分の足で丹念にたずね歩き、それを実証しようと考えた。

チベット関係の文献を読み始めて、数日後、阿部治平氏の労作、「もう一つのチベット現代史 プンツォク・ワンギェルの夢と革命の生涯」に出会った。そこには岡本氏の「長征」の記述とは正反対の場面が記されていた。私の「怨念説」とは逆の、「労農紅軍がチベット族地域のカム地方を通過したとき、チベット族が“ポエパ人民政府”を結成し、共産党に協力して共に地方軍閥と闘った」と書かれていたのである。さらにここで私は、中国共産党の抗日政策や「ポエパ人民政府」の影響を受けた、20歳そこそこのプン・ワン氏がチベット共産党を組織して闘うという記述を目にすることになった。しかもこの著書には、プン・ワン氏がその後、あの「チベット和平17条協定」のとき毛沢東とダライ・ラマの通訳を務めたこと、そして投獄されたこと、18年間の獄中で弁証法の思索を深めたことなど、その数奇な生涯が綴られており、私はそれに心を奪われた。

阿部先生の書を読み、「怨念説」に自信をなくした私は、とにかく長征の戦跡を、私自身の目で見て足で歩き、土地の古老に聞いてみて、それに決着をつけようと考え、四川省、青海省、甘粛省などのチベット族地域を、足かけ3年、40日間ほどかけて歩き通した。そして労農紅軍とチベット族との戦闘が、随所で実際に行われたことを確認した。しかしまたカム地方を中心にして、人民政府が結成されていたことも同時に確認した。結論として、現在のチベット族と漢族の間の不幸な状況を「怨念説」だけで説明するのには、無理があることがわかった。私は「怨念説」を取り下げることにした。

そのような長征行脚の途中、青海省西寧市で、当時、民族学院の教師を務められていた阿部治平先生にお会いすることができた。そしてそこで、プン・ワン氏がまだ存命中であることを知った。私はプン・ワン氏の存命中に、是非、お会いしたいと思った。中国革命の闘士に会い、歴史の生き証人としての熱き血潮に触れ、また弁証法探求の哲学者から獄中18年の思想の片鱗を学び取りたかったからである。

上海に帰って、さっそく私はプン・ワン氏の書物を買って求め目を通してみた。しかし中国語の原本なのでさっぱりわからなかった。それでもプン・ワン氏の獄中での思索の成果である弁証法を、日本語に訳してなんとか読んでみたかった。それというのも、私は高校時代に、「ものの見方考え方」(三浦つとむ著)を読んで、弁証法を自分の思考方法としていたからである。三浦氏はその本で巾着の紐を例に取って弁証法を、次のように解説していた。「昔、よく巾着を掏られる旅人がいた。それに懲らした旅人は太い紐の巾着を首からぶら下げようとした。そうした結果、それ以降、掏られることはなくなった。旅人は旅籠に泊まって、夜も巾着を首にかけたまま寝た。その晩、泥棒が忍び込んできた。泥棒がふと旅人を見ると首に太い紐が巻き付いている。泥棒はしめたと思い、巾着のその紐で首を絞め殺し巾着を盗んでいった」。つまり三浦氏はこの例で、旅人がもっとも安全だと考えていた太い巾着の紐が、同時にもっとも危険なものであったと教えていたのである。私はその例で、一つの事物の中に、まったく正反対のものが存在しているということを学んだ。

あまり勉強が好きではなかった私ではあったが、それ以降、弁証法の本だけはよく読んだ。柳田謙十郎、古在由重、武谷三男など、もちろん毛沢東の「矛盾論」や「実践論」も読んだ。ヘーゲルやマルクスの書も読んだが、残念ながらよくわからず途中で挫折した。それでもそのおかげで、思想は柔軟になり、どんな人間を見ても性善と性悪の対立物の統一体として見るができるようになり、その変容に動揺することがなくなった。また他人におだてられても超然とし、騙されても泰然としていることができ、どのような異文化に接しても、相手を許容できる度量と利用できる力量を兼ね備えることができた。これが、世界各地で華僑、印僑、ユダヤ人などの名うての商人を相手にして、私が現在まで生き残って来ることができた理由であると、私は思っている。もちろん、弁証法の「質から量への発展転化の法則」、「否定の否定の法則」も、随時、経営に応用した。

したがって私は弁証法的思考が、人生にきわめて有効であることを確信している。プン・ワン氏はその弁証法を獄中で究めたという。私はそれを邦訳、出版し、より多くの人に読んでもらいたいと思った。もちろん同時に、このような哲学書は出版してもおそらく売れないので、自費出版のような形を取らざるを得ないだろうとも考えた。すぐに阿部先生に相談したところ、「邦訳するには“月には液体の水が存在する”の書がよい。訳者には日本在住のチュイデンブンくんを推薦する」という返事をいただいた。プン・ワン氏の書を邦訳する作業は難航した。母語がチベット語であるチベット人であるチュイデンブンくんが、中国語を日本語に翻訳するには、かなりの努力と時間が必要であったからである。しかし逆にチベット仏教と哲学が色濃く反映しているこの書は、チベット人であるチュイデンブンくんには、邦訳できなかったらうとも思う。プン・ワン氏はこの書で、共産主義の哲学である唯物弁証法とチベット仏教と哲学が持つ「縁起論」を、弁証法的に統一したからである。

プン・ワン氏のこの著書の根幹は、従来の弁証法の第一法則「対立物の統一」を、「対立物の同一と同一物の対立」と捉え直したところにあると、私は考える。プン・ワン氏は、従来の弁証法では、事物は「対立物の統一」で成立しており、その対立物の相互転化が運動である、つまり一を二に分けて理解していたところを、事物は「対立物の同一と同一物の対立」で成り立っており、それが二重に相互転化し合うことが運動である、つまり一を四に分けて分析するのが正しいと主張しているのである。そしてその論理を積み上げ、「月に液体の水がある」という例で論証したのが、この著書である。

このブン・ワン弁証法を体得して、他の現象を分析するには、かなりの修練が必要であろう。しかし実地に応用されなければ、それはまさに宝の持ち腐れとなる。弁証法は思考方法の一種であるから、これを身に付け、森羅万象を解析してこそ、大きな意味がある。とは言っても、いまさら私が、ブン・ワン弁証法を自らの血肉として、社会を解析してみても、その真価を発揮する時間は限られている。私は今、訳者のチェイデンブンくんを講師にして、若い人たちといっしょにブン・ワン弁証法の勉強会を行うことを考えている。

余談だが、日本には、松村寧雄先生が考案されたマンダラチャート法という独特の思考方法がある。松村先生は仏教のマンダラから、それを発想されたという。この思考方法は、事物を総合的に捉え、それを深化させるのに、きわめて有効である。私は、ラサのポタラ宮の最上階で、立体マンダラを見たとき、松村先生のマンダラチャート法がチベット仏教とチベット哲学に深く根ざしているものと確信した。松村先生は学会を作って、このマンダラチャート法の普及を図っておられる。私もそれに習って、上記の勉強会をブン・ワン弁証法学会に発展させたいとも考えている。

### 3. チベット族への提言

2008年の夏、私が「怨念説」を主張しながら、チベット暴動の真相をつかもうと努力していたとき、私の手元に京都大学の西大教授から分厚い文書が届けられた。それはラサで暴動が起きた当日、現場に居合わせた日本の大学院生の大木崇氏の手記だった。私はそれを読んで、これこそが真相だと思った。そのとき彼はラサで暴動に巻き込まれて、漢族と間違われ、チベット族に殺されかけたのである。この手記には、その前後のラサの状況が、ありありと描かれていた。文章も上手だった。私はこの手記を、すぐに世に出すべきだと思った。

ただし、もしこれが虚構だった場合のことも危惧して、ひとまず西大先生とその手記の検証のためにラサの現場を訪ねることになった。8月、西大先生と私はラサに入った。暴動以後、日本人としてはジャーナリストを除くと、初めてのラサ入りのようだった。ものものしい警戒の中で、私たちは大木氏が書いてくれた地図や写真を片手に、暴動現場の現地検証を続けた。そしてそのほとんどが正しいということを現場で確認した。帰国後、ただちに、その手記を「実録 チベット暴動」(かもがわ出版)と題して発刊した。この本は、当事者としての大木氏の実体験記録であり、それを私と西大先生が半年後に入念に現場検証したものであり、チベット暴動について真実を語っている世界で唯一の本である。

ラサ暴動は、まずチベット仏教僧やチベット族青年の暴発があり、それに対して中国政府の大弾圧があったのである。私はだれもこれを否定することはできないと確信を持っている。この本が発刊されてから、大木氏や西大先生そして私への反論が、まったく無いことが何よりの証拠でもある。反中派や嫌中派は、中国政府がチベット族を弾圧したという側面だけに拘泥しているが、その大弾圧はチベット仏教僧やチベット族青年の漢族への暴行や漢族商店への焼き討ち・掠奪への対抗措置だったのである。それは、ダライ・ラマ14世が常に非暴力を提唱しているにもかかわらず、その教えを聞かず、チベット仏教僧やチベット族青年が暴発した結果だったのである。

ダライ・ラマ14世は、暴力の応酬からはなにも生まれないと語り、忍耐の重要性を説き、非暴力を提唱している。ただし同時に、だまっけてはならないと次のようにも説いている。「忍耐という言葉の意味を、人にどんなひどいことをされようとも、ただ黙って我慢することだと思っている人がいます。でも、それは間違いです。誰かが何かひどいことをしてきたときには、相手に仕返しをしてやろうという気持ちや怒りを持たずに、それを阻止することができるなら、断じてそうすべきなのです。相手がむちゃくちゃなことをするのを放っておけば、その人は甘やかされてしまい、結局、その人のためにならないので、というような正しい動機で、相手のひどい仕打ちを阻止することは正しいことですし、必要なことでもあります。“怒りの心をもたずに対応する”という実践は、いつでも、どんなときでも実行するように努力しなければなりません。しかし、脅かされたりして、生命に危険があるような場合は、まず生命を守ることを考えるべきです。自分は忍耐の修行をしているのだといって、何の抵抗もせず殺されてしまえば、元も子もありませんので。しかし“心の中に怒りをもつことなく対応する”という本当の意味での“忍耐”を修行することができたなら、どんなことでも赦すことができるようになるでしょう」。

つまり、チベット仏教僧やチベット族青年の起こしたラサ暴動は、ダライ・ラマ14世の非暴力の教えに叛いたことになる。ダライ・ラマ14世は、「相手に仕返しをしてやろうという気持ちや怒りを持たずに、それを阻止することができるなら、断じてそうすべきなのです」と主張しているのである。しからばチベット仏教僧やチベット族青年は、現在の苦境下で、どのような態度を取るのがのぞましいのだろうか。私は、このダライ・ラマ14世の主張は、チベット族に弁証法的対応を求めているのであると考える。

それは、暴力以外のあらゆる場面で、漢族を凌駕することである。たとえばチベット族地域にチベット仏教を中心とした高い倫理・道徳で守られた理想郷を確立することである。学問においても、漢族をはるかに上回る英才を数多く輩出し、新しい発見や発明をどんどん繰り出すべきである。現在、大学入試などでチベット族に与えられている特典などを返上し、堂々と漢族と渡り合うべきである。漢族から漢語教育を押し付けられているなどと不満を言っているのではなく、それをバイリンガルとなる機会とすべきである。またビジネスでも商才を発揮して多数の企業を創設し、チベット族地域か

ら漢族商人を駆逐し、同時に漢族地域へ大挙進出すべきである。

同じ少数民族である朝鮮族は、それを成し遂げている。小島衣料の吉林省延辺朝鮮族自治州琿春市にある工場では、総経理以下、主要幹部はすべて朝鮮族である。彼らは、漢語・朝鮮語・日本語を自由に操ることができ、きわめて優秀なトリリンガルだからである。ちなみに一般ワーカーは漢族がほとんどである。また延辺朝鮮族自治州には、朝鮮族の企業経営者が多く、この地域ではビジネスにおいても漢族をはるかに凌駕している。したがって朝鮮族には暴動を起こそうなどと考えている人間はほとんどいない。朝鮮族の生き方は少数民族の見本である。

最近、チベットではチベット仏教僧の焼身自殺が多発している。これもダライ・ラマ14世の教えに反している。自殺について、ダライ・ラマ14世は次のように語っているからである。「日本では自殺する人が多いと聞いていますが、そうした悩みを抱えている人は、まず私たちにはこの人生だけではなく、前世や来世もあるのだ、ということを考えることです。そして私たちを苦しめている煩惱を滅するためには、その対策を講じて滅することが必要であり、ただこの人生に終止符をうって、新しい人生に切り替えたところで、煩惱がなくなるわけではない、ということまわりの人が彼らに説明してあげるとよいでしょう。人が自殺するのは、自分が大切なあまり、かわいい自分を打ちのめしている苦しみに我慢できず、死んでしまえばその苦しみをなくすことができる、という考えから自殺をするのではないかと思います。そしてもっと深く考えるならば、人は誰でも自分に対する執着と期待があり、物事がその期待通りにならなかったとき、執着が自己嫌悪に変わってしまうのではないかと思います。ですから、次の生のことを考えずに、“死ねば苦しみは終わる”と思っているのですが、実際には、死ねばこの人生が終わるだけです。でも死なずにいれば、いずれは今よりも幸せなときがやってくる可能性も残されているのです」。

たとえ抗議の自殺であったとしても、自殺はすべきではない。チベット族はそのエネルギーを生きて使うべきである。すべからずチベット族は、暴力も焼身自殺も控え、臥薪嘗胆し、漢族を凌駕すべく努力を積み重ねるべきである。その点で、獄中18年間を生き抜き、弁証法を究めたプン・ワン氏の生き方は一つの手本となる。

「プン・ワン氏は、1960年に逮捕投獄されると、獄中ですさまじい拷問にあい、屈辱に怒り狂い、あるときは毛沢東や周恩来に無実を訴える血書を書き、あるときは絶望の果てに自殺を図った。2年ほどの荒廃した精神生活ののち、容疑は容易なことでは消えないと悟り、ようやく冤罪が晴れる日を待つという心境になった。獄中で本が借りられるようになると、革命運動の忙しさの中で読もうと思っても読めなかった漢語訳のマルクス主義の古典を読み始めた。…(略)。弁証法についての研究が進むにつれて彼は、中国革命の正反両面の経験を弁証法に基づいて総括した。彼にとって弁証法研究は、理論研究というより実践的意義のあるものであった。彼の獄中のノートはトイレットペーパーで、ペンは窓際に落ちていた針金、インクは上着を洗った時に落ちる青い水を蒸発濃縮させたものであった」(「チベット人哲学者の思索と弁証法」:阿部治平先生の解説より)。

#### 4. 日本人としてなにをなすべきか

中国の少数民族問題は、中国人自身の問題であり、日本人がその解決方法について、とやかく言う筋合いのものではない。大事なことは、先入観を捨てて、事態の真相をしっかり把握し、世界に情報を提供することである。たとえばダライ・ラマ14世の亡命先のダラム・サラについて、多くの訪問者はその地を理想郷のように描いているが、私が現地でも見たものは、極端な差別社会であり、亡命チベット人の豪邸とインド人のスラム街であり、世界中からの寄付金で優雅に暮らすチベット仏教僧と、彼らの居住する僧院を掃除しているインド人の姿だった。このような現況を世界中の人の目の前に、提示すべきなのである。

また日本人としてできることの一つは、このプン・ワン氏の著書などのような、少数民族自体が意識していない価値ある思想や文化を発掘し、日本人に紹介し、同時に少数民族にも再認識させることである。このようなことは、チベット族だけでなく、ウイグル族にも当てはまる。私は、ウルムチ暴動の真相を調べるために、なんどもウルムチ・カシュガル・ヤルカンドなどを訪ねた。ウイグル族と中央アジアの関係を追って、パキスタンやウズベキスタンにも行ってみた。そしてわかったことは、あのウルムチ暴動も、やはりウイグル族青年の暴発が引き金となっていたということである。あのウルムチ暴動を、漢族の一方的な大弾圧だったと報道することは誤りである。やはりこの地でも暴力の応酬が、悲惨な結果を生んでいるのである。

なんどもカシュガルの地に足を運んでいるうちに、私は11世紀に生きた哲学者:ユスフ・ハス・ハシフの墓で、その壁一面に刻まれた文言を目にし、それに心を奪われた。それは中国語で書かれたもので難解だったが、私はこれをインドのカウティリヤの「実利論」や中国の韓非子の「韓非子」、イタリアのマキャベリの「君主論」にも匹敵するものだと読み取った。さっそくその売店でその書を買って求めてみたが、中国語の翻訳物しかなく、ウイグル語で書かれた原書はそこにはなかった。やっと市内の古本屋で1冊みつけたし、購入してホテルへ帰った。その後、現地のウイグル人とその書の内容について意見を交わしてみたが、その価値についてはあまり高く認識していないようであった。目下、日本で中国語に堪能な若手日本人女性と、在日ウイグル人の協力を得て、中国版と原典の双方を照らし合わせて翻訳中である。

今年中には世に出したいと思っている。

プン・ワン氏についても、彼が存命中に聞き取り調査をして、まだまだ解明しておきたいことがたくさん残っている。反中で、在日チベット人の代表格であるペマ・ギャルポ氏は、最新の著作でプン・ワン氏のことを、「プンツォク・ワンギェルたちは民族主義者であり、国を裏切ろうと思って中国共産党に手を貸したわけではないと思います。その表れとして、今も存命であるプンツォク・ワンギェルは、数年前に胡錦濤に対して17か条条約を守ってほしいという嘆願書を出しています。結果として、中国の先棒を担ぐ形となってしまいましたが、チベットの将来を考える心に裏表はなく、私は80年代に本当の意味でのチベット自治が実現する兆しが見えたとき、プンツォク・ワンギェルが初代首相にふさわしいと思ったほどです」と評価している。

阿部先生によれば、「かつてプン・ワン氏が目指した新チベットは、チベット人地域全体にまたがり、ダライ・ラマを国家の象徴的存在とし、農牧民からの搾取を軽くし、教育・衛生などの向上をめざす民主主義政府であった」、「中国共産党は、1949年の革命成功を目前に民族政策を自治区方式に転換し、民族独立論を地方民族主義として排除するようになる」、そして投獄されることとなったのである。この経過や出獄後の歩みについて、プン・ワン氏自身の総括を、私はまだ見聞きしていない。幸い、阿部先生が近日中に、プン・ワン氏の伝記を書かれる予定だという。私はその伝記で、プン・ワン氏を通じて、中国革命が浮き彫りにされるのを期待している。

なお、プンワン氏は記念パーティー終了後、別室でチュイデンブンくん、大西先生と私の質問に対して、次のように答えた。「毛沢東はチベット工作談話の中で、そのような内容の話をしたかどうかは分からないが、ダライ・ラマ法王は、当時、毛沢東に対して、民族地域の書記は必ず当地の民族でなければならないと要求した」、「毛沢東は偉大な歴史的人物だ。しかし彼は人生の後期に重大な罪を犯した人物だ」。

残念ながら、チュイデンブンくんは、プン・ワン氏からはダライ・ラマ14世への感想は聞けなかったという。秘書によると、プン・ワン氏も一般のチベット人と同様に、ダライ・ラマ法王を慈悲と智慧が深い観音菩薩の化身として尊敬しているとのことであり、中国当局が、このような老人までも監視しているのは、やはりダライ・ラマ14世との関係を警戒しているからだという。

以上